

日蓮大聖人御書全集

せんにちあまごぜんごへんじ

千日尼御前御返事

らいもんのつづみごしよ

(雷門鼓御書)

新版

1744

フ

1746

せんにちあまごぜんごへんじ　らいもんのつづみごしょ

千日尼御前御返事（雷門鼓御書）

こうあんがんねん

うるう

がつ

にち

さい

せんにちあま

弘安元年(’78)

閏10月19日

57歳

千日尼

青鳶一貫文・干し飯一斗、種々の物給び候い了わんぬ。

ほとけ　つち　もちい　くよう

進

とくしよう　どうじ

う

仏に土の餅を供養せし徳勝童子は阿育大王と生まれ

ほとけ　こんず

ろうによ

しゃくしぶつ

う

たり。仏に漿をまいらせし老女は辟支仏と生まれたり。

ほけきよう　じっぽうさんぜ　しょぶつ

おんし

じっぽう　ほとけ　もう

法華経は十方三世の諸仏の御師なり。十方の仏と申すは、

とうほう　ぜんとくぶつ　とうなんぽう

むうとくぶつ　なんぽう

せんだんとくぶつ　せいなんぽう

せいなんぽう

東方の善徳仏・東南方の無憂徳仏・南方の栴檀徳仏・西南方

ほうせぶつ　かいほう　むりょうみょうぶつ

かいほくほう

さいほくほう　けとくぶつ

ほっぽう

の宝施仏・西方の無量明仏・西北方の華徳仏・北方の

そうとくぶつ　とうほくほう　さんじゅぎょうぶつ

じょうほう

こうしゅとくぶつ

かほう

相徳仏・東北方の三乗行仏・上方の広衆徳仏・下方の

明徳仏なり。三世の仏と申すは、過去莊嚴劫の千仏、現在
賢劫の千仏、未來星宿劫の千仏、現在
涅槃經等の大小・權實・顯密の諸經に列なり給える一切の
諸仏、尽十方世界の微塵數の菩薩等も、皆ことごとく法華經
の妙の一宇より出生し給えり。

故に、法華經の結經たる普賢經に云わく「仏の三種の身
は、方等より生ず」等云々。「方等」とは月氏の語、漢土に
は大乘と翻ず。大乗と申すは法華經の名なり。阿含經は
外道の經に対すれば大乘經、華嚴・般若・大日經等は、

阿含經に對すれば大乘經、法華經に對すれば小乘經なり。法華經に勝れたる經なき故に一り大乘經なり。

例せば、南閻浮提八万四千の国々の王々は、その国々にては大王と云う。転輪聖王に對すれば小王と申す。乃至、六欲・四禪の王々は大小に渡る。色界の頂の大梵天王独り大王にして、小の文字をつくることなきがごとし。

仏は子なり、法華經は父母なり。譬えば、一人の父母に千子有つて、一人の父母を讚歎すれば、千子悦びをなす。一人の父母を供養すれば、千子を供養するになりぬ。また

ほけきょう

くよう

ひと

じっぽう

ぶっぽさつ

くよう

くどく

おな

法華経を供養する人は、十方の仏菩薩を供養する功德と同

じきなり。十方の諸仏は妙の一字より生じ給える故なり。

譬えば、一の師子に百子あり。彼の百子、諸の禽獸に

犯さるるに、一の師子王吼うれば百子力を得て、諸の

禽獸、皆頭七分にわる。

法華経は師子王のごとし。一切の獸の頂とす。法華経

の師子王を持つ女人は、一切の地獄・餓鬼・畜生等の百獸
に恐るることなし。

譬えば、女人の一生の間の御罪は諸の乾れ草のこと

たと

によいん

いつしおう

あいだ

おんつみ

もろもろ

か

くさ

おそ

いちこうべ

しちぶん

いっさい

じごく

がき

ちくしそうとう

ひやくじゅう

う

おか

いち

しおう

ひやくしちから

え

もろもろ

たと

いち

ひやくし

か

もろもろ

ゆえ

じっぽう

しょぶつ

みよう

いただき

く

く

ゆえ

し。法華經の妙の一字は小火のごとし。小火を衆草につき
ぬれば、衆草焼け亡ぶるのみならず、大木・大石、皆焼け失
せぬ。妙の一字の智火もつてかくのごとし。諸罪消ゆるの
みならず、衆罪かえりて功德となる。毒薬変じて甘露とな
るこれなり。譬えば、黒漆に白物を入れぬれば白色とな
る。女人の御罪は漆のごとし、南無妙法蓮華經の文字は
白物のごとし。人は臨終の時、地獄に墮つる者は黒色と
なる上、その身重きこと千引きの石のごとし。善人は、た
とい七尺八尺の女人なれども、色黒き者なれども、臨終

いろへん

しろいろ

かる

がもう

やわ

に色変じて白色となる。また軽きこと鵝毛のごとし、軟ら
かなること兜羅綿のごとし。

佐渡国よりこの国までは山海を隔てて千里に及び候に、
女人の御身として法華経を志しましますによりて、年々
に夫を御使いとして御訪いあり。定めて法華経・釈迦・
多宝・十方の諸仏、その御心をしろしめすらん。

譬えば、天月は四万由旬なれども、大地の池には須臾に影
浮かび、雷門の鼓は千万里遠けれども、打てば須臾に聞こ
ゆ。御身は佐渡国におわせども、心はこの国に来れり。仏

に成る道もかくのごとし。我らは穢土に候えども、心は
靈山に住むべし。御面を見てはなにかせん、心こそ大切に
候え。

いつかいつか、釈迦仏のおわします靈山会上にまいりあ
い候わん。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経。恐々謹言。
弘安元年後十月十九日

千日尼御前御返事